

第23節

जीवञ्छवो भागवताङ्घ्रिरेणुं
न जातु मर्त्योऽभिलभेत यस्तु ।
श्रीविष्णुपद्या मनुजस्तुलस्याः
श्वसञ्छवो यस्तु न वेद गन्धम् ॥ २३ ॥

*jīvañ chavo bhāgavatāṅghri-reṇuṁ
na jātu martyo 'bhibheta yas tu
śrī-viṣṇu-padyā manujas tulasyāḥ
śvasañ chavo yas tu na veda gandham*

jīvan—生きているうちに; *śavaḥ*—死体; *bhāgavata-āṅghri-reṇuṁ*—純粋な献愛者の御足についた埃（ほこり）; *na*—決して～ない; *jātu*—いつでも; *martyaḥ*—死の; *abhibheta*—特に受けいれて; *yaḥ*—人; *tu*—しかし; *śrī*—富と; *viṣṇu-padyāḥ*—ヴィシュヌの蓮華の御足の; *manu-jaḥ*—マヌの子孫（人類）; *tulasyāḥ*—トウラシーの木の葉; *śvasan*—呼吸をしているあいだ; *śavaḥ*—それでも死体である; *yaḥ*—～である者; *tu*—しかし; *na veda*—ぜったいに経験したことの無い; *gandham*—その香り。

主の純粋な献愛者の御足につく埃を一度も自分の頭に付けたことの無い人は、すでに死んでいます。そして主の蓮華の御足から出ているトウラシーの葉の香りを嗅いだことのない人も、たとえ呼吸をしても屍（しかばね）にすぎません。

要旨解説

シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラは、呼吸をしている死体は幽霊である、と言います。人は死ぬと「死んだ」と言われるのですが、一般人の目に見えない希薄な姿でふたたび現われ、なにかをするのであれば、その死体は「幽霊」です。幽霊は常に不吉な存在で、だれにもおぞましい状況を作りだします。同じように、純粋な献愛者にも寺院に祭られているヴィシュヌ神像にもまったく敬意を示さない幽霊のような非献愛者は、いつも献愛者に恐ろしい状況を作りだします。そういった不純な幽霊がなにを捧げても、主はぜったいに受け入れません。好意を持つ人にその好意を示すまえに、その人が飼っている犬を好きになったほうが良い——と言われることがあります。純粋な献愛奉仕の境地は、主の純粋な献愛者に心をこめて仕えてこそ実現できるものです。

ですから、献愛奉仕の第一条件は純粋な献愛者の召使いになることであり、それは「同じようにほかの純粋な献愛者に仕えている純粋な献愛者の蓮華の御足についている埃を受け入れる」という表現で満たされます。それこそが、純粋な師弟継承の道、すなわち献愛奉仕のパランパラ（paramparā）です。

マハーラージャ・ラーフガナが、偉大な聖者ジャダ・バラタに訊きました。「そのようなパラマハンサの境地をどのようにして手に入れたのでしょうか」。聖者が答えます（『シュリーマド・バーガヴァタム』（第5編・第12章・第12節））。

*rahūgaṇaitat tapasā na yāti
na cejyayā nirvapaṇād grhād vā
na cchandāsā naiva jalāgni-sūryair
vinā mahat-pāda-rajo-'bhiṣekam*

「ラーフガナ王よ。パラマハンサという献愛奉仕の完璧な境地の生活は、**偉大な献愛者の御足の埃**によって祝福されていなければ到達できない。タパッシャ・苦行をしても、ヴェーダの崇拝法に従っても、放棄階級の生活をして、世帯者生活義務を遂行しても、ヴェーダ聖歌を唱えても、あるいは灼熱の太陽の下、氷水の中、燃えさかる炎の前で苦行をしても叶うものではない」

言葉を変えると、「主シュリー・クリシュナは純粋で無条件に仕える献愛者の財産だから、献愛者だけがほかの献愛者にクリシュナを授けることができる」ということです。クリシュナをじかに得ることはできません。ですから、主チャイタンニヤは自らを *gopī-bhartuḥ pada-kamalayor dāsa-dāsānudāsaḥ*（ゴーピー・バルトッ パダ・カマラ ヨール ダーサ・ダーサーヌダーサハ）（『チャイタンニヤ・チャリタームリタ』マデヤ 第13章・第80節）、「ヴリンダーヴァナでゴーピー（乙女）たちを養っている主の召使いに仕えるもっとも従順な召使い」と呼んでいます。ですから、純粋な献愛者は主に直接近づこうとはせず、主の召使いに仕えている召使いを喜ばそうとし、それでこそはじめて、主の蓮華の御足についているトゥラシーの葉の味を味わうことができます。『ブラフマ・サムヒター』には、「ヴェーダ經典の大学者になったところで主を見つけることはできない。純粋な献愛者をとおしてこそたやすく近づくことができる」と言われています。ヴリンダーヴァナにいる純粋な献愛者たちは、主クリシュナの喜びの力であるシュリーマティー・ラーダーラーニーの慈悲が授かるように祈ります。シュリーマティー・ラーダーラーニーは、至高の全体者（クリシュナ）が持つ女性特有の心優しさがそのまま現われた方であり、それは一般的女性の特質の完璧な境地に似ています。ですから、ラーダーラーニーの慈悲は正直な献愛者にはいともたやすく手に入るものであり、そのような献愛者をラーダーラ

一ニーが主クリシュナに勧めれば、主はすぐにその献愛者を自分の交流に入ることを許してくれるのです。結論として、主からじかに慈悲を授かるよりも、主の献愛者から慈悲を授かるためにもっと真剣になり、そうすれば（その献愛者の深い情けを授かって）主への奉仕に対する本来の魅力を取りもどすことができる、と言えます。